

イエスがペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子を連れて高い山に登り、彼らの目の前でイエスの顔が太陽のように輝き、服は光のように白くなったと記されています。著者は、これは、ただ単に偶然ある時、イエスの栄光の姿が表されたのではなく、イエスが受難と死を通して受けることになる栄光の姿が前もって示された出来事であると記すのです。ここには、イエスの受難・死・復活にあずかるという受難節全体の根本的なテーマが示されています。そして、彼らはゲツセマネで、イエスの最も深い苦しみの姿の目撃者ともなるのです。そしてモーセとエリヤが現れました。モーセは出エジプトの指導者、イスラエルの人々に律法を伝えた人で、エリヤは預言者の代表する人物です。著者は、イエスがこの二人と共にいることで、イエスの受難と復活が聖書に記されている神さまの計画の中にあることを示しているのです。その時、ペトロは小屋を建てて、三人がそこに留まってもらい、イエスの栄光の姿がいつまでも残るようにしよう、と思ったのです。しかし、イエスの栄光とは小屋を建ててそこに留めておけるようなものではなく、この光景は一瞬にして消え去りました。今はまだ本当の栄光の時ではなく、受難に向かう時だからです。

雲の中からの声は、神さまの声です。雲は出エジプト記に記されているように、「神さまがそこにおられる」ことの徴です。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」。この言葉は、ヨルダン川でイエスが洗礼を受けた時に天から聞こえた声と同じです。この受難の道もまた神の子としての道であることが示されるのです。そして、イエスは弟子たちに「これに聞け」と呼びかけます。「聞く」は聞き従うことを意味します。これは受難予告(16:24)で言われていたことと対応していると思われます。実際には、弟子たちはイエスの栄光の姿を見たのにも拘わらず、最後まで従っていくことができず、イエスが逮捕された時、皆逃げてしまったのです。神さまの声が聞こえたので、三人はひれ伏し、非常に恐れましたが、イエスは「恐れることはない」と言いました。「恐れるな」という言葉こそが、イエスの栄光の姿を弟子たちに見せた目的です。

イエスは私たちのために十字架の苦しみと死を引き受けました。そのイエスが復活させられ生きて、私たちと共にいる。これがイエスの栄光です。山上の変容の出来事はイエスが受難と死をとおして受ける栄光の姿を弟子たちに垣間見させ、そのイエスに従うように弟子たちを励ますための出来事だった、と著者は記すのです。